

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	グローバル時代に求められる次世代教員養成プログラムの開発 : 日米協働による「体験型海外教育実地研究」の教育的効果の評価を通して
Author(s)	深澤, 清治; 松浦, 武人; 松宮, 奈賀子; 渡邊, 巧
Citation	広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書, 18 : 23 - 28
Issue Date	2020-03-19
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/48929">10.15027/48929</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048929">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048929</a>
Right	
Relation	



# グローバル時代に求められる次世代教員養成プログラムの開発

## —日米協働による「体験型海外教育実地研究」の教育的効果の評価を通して—

研究代表者 深澤 清治（英語教育学講座）

研究分担者 松浦 武人（教職開発講座）

松宮奈賀子（初等カリキュラム開発講座）

渡邊 巧（初等カリキュラム開発講座）

## I 研究の背景と目的

### 1. 背景

急速に多様化する日本の学校教育環境に対応できる資質・能力（グローバルコンピテンシ）を有する次世代教員を養成することは、本研究科の喫緊の課題である。毎年9月中旬に実施している、大学院生による体験型海外教育実地研究や現地協定校との交流を通して、どのようなグローバル教師力が養成されてきたのであろうか。本実地研究の成果を検証するため、過去のプログラムで培われた英語コミュニケーション能力や社会的能力、多文化理解能力の基盤となる資質・能力を日米双方の当事者による検討・評価を行う必要がある。

### 2. 目的

上記のような背景をもとに、令和元年度教育学研究科共同研究プロジェクトにおいては、次の2つの目標を掲げて「体験型海外教育実地研究」を実施することにした。

①「体験型海外教育実地研究」他の実施：第1の目的は、本年度で通算、13回目の実施（参加者人数累計100名以上）となるアメリカ合衆国での「体験型」（大学院生による海外での体験型の教育実践）の企画・実施と、第15回となる「学校間交流国際フォーラム」の成果や課題の分析・検討を通して、国際共同研究を通じた「グローバルマインド」を備えた教員の育成を目標としてきた本プログラムの教育的効果および参加した院生による内省的変容を日米合同で検討・評価することである。さらに、この研修が受入側の米国の教員や実習校の生徒たちに与えたインパクトについても検討する。

②次世代型教員養成プログラムの提言：第2の目的は、10～20年先の近未来に多文化社会化すると予想される日本において教育人材として活躍できる教員を育てる次世代型の教員養成プログラムのあり方について提言を行うことである。本プロジェクトには過去20年以上の研究・実践の蓄積があり、それを踏まえて、グローバル教員に求められる英語コミュニケーション能力や社会文化的能力、多文化理解能力の基盤となる資質・能力など、教員養成に関する妥当性かつ信頼性のある研究成果を提案することが期待される。

（深澤清治\*）

## II 第15回学校間国際フォーラムにおける協議の概要

### 1. 日程等

2019年度の学校間交流国際フォーラムのテーマは「学校間国際交流を通じた次世代グローバル教員養成」であり、その概要は以下の通りであった。

主催 広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター  
日時 2019年7月13日(土) 13:00-16:10

会場 広島大学大学院教育学研究科 C203 教室 (広島県東広島市鏡山1丁目1-1)

テーマ 学校間国際交流を通じた次世代グローバル教員養成

(Next Generation Global Teacher Education through overseas teaching practicum)

内容

総合司会: 松浦武人 (広島大学大学院教育学研究科)

開会行事(13:00-13:10)

・挨拶 草原和博 (広島大学大学院教育学研究科研究・国際交流担当副研究科長)

基調報告 深澤清治 (広島大学 GPSC 代表)

テーマ「体験型海外教育実地研究 2017 参加者の意識変容について」

シンポジウム(13:50-15:50)

テーマ「体験型海外教育実地研究体験が日米の学校に与えたインパクト」

(The Impact of Overseas Teaching Practicum in Japan and the US)

コーディネーター 渡邊巧 (広島大学大学院教育学研究科)

コメンテーター Thomas Hennessey (米国 NC 州 E. M. エッペス中学校)

Cori Greer-Banks (米国 NC 州 エクスプローリス中学校)

話題提供者 藤井志保 (学習開発学専攻・広島大学附属三原中学校)

渡部真吾 (教職開発専攻・新居浜市立東中学校教諭)

(体験型 2018 経験者・エクスプローリス中学校)

総括コメント 小原友行 (福山大学・前広島大学 GPSC 代表)

閉会行事 (16:00-16:10)

・挨拶 深澤清治 (広島大学 GPSC 代表)

本フォーラムと同時に、会場内で日米の学校間交流を促進する広島大学 GPSC の諸活動を紹介する写真パネル、教材集、紀要などの提示が開催された。

## 2. 協議の内容

まず、深澤清治氏は「体験型海外教育実地研究 2017 参加者の意識変容について」と題して、基調報告をおこなった。

これまでに大学院生が開発した授業は、3つに分類できることが説明された。①「主に日本の伝統や文化、特色ある事象などを紹介する授業—Lecture (講義)」, ②「主に特定のテーマについて、内容を深めたり日米における共通点や相違点を考えたりする授業—Comparison/Contrast (比較/対照)」③、「主に日米の児童生徒がそれぞれの生活や想いを交流する授業—Collaborative (協働)」である。当初は、日本文化の「講義型」が多く見ら

れたが、米国の児童・生徒との「協働型」に移行してきたと述べられた。また、2017年度参加者の変容について、アンケート結果が紹介された。「コミュニケーション力」「多様性を受容し尊重するようになった」「チャレンジする勇気が伸びた」について顕著な伸びが確認された。

次に、「体験型海外教育実地研究体験が日米の学校に与えたインパクト」について、日米の双方から話題提供がおこなわれた。

藤井氏、渡部氏は、今回の“挑戦（体験型海外実地研究への参加）”によって、教育観が広がったと述べた。ヘネシー氏は、グローバルマインドを持った、アクティブな生徒を育てるための授業実践について報告をおこなった。バンクス氏は、プロジェクトベースドラーニングによるグローバル教育、社会科教育の実践について報告をおこなった。予測不可能な社会では、グローバルパートナーシップを通じてのみ、人類は持続可能な社会を築くことができると述べられ、国際交流の重要性が指摘された。

質疑応答では、アクティブラーニング（協働学習、プロジェクトベースドラーニング、サービ斯拉ーニング）の評価方法等について意見が交わされた。

（松浦武人\*・松宮奈賀子・渡邊 巧\*）

### Ⅲ 令和元年度体験型海外教育実地研究の概要

#### 1. 日程等

2019年度の「体験型海外教育実地研究」には、4名の大学院生が参加した。本授業の実施状況（全体日程）は以下のとおりであった。

- 2019年4月 9日（火） 本授業の概要と計画説明
- 4月 26日（金） 授業研究テーマ事例の考察及び渡航の諸手続きの確認
- 5月 24日（金） 授業研究テーマ案の交流・設定
- 6月 4日（火） 学習指導案の検討
- 6月 25日（火） 学習指導案（英語版）の検討1
- 7月 13日（土） 第15回学校間交流国際フォーラム参加
- 7月 14日（日） 「体験型海外教育実地研究」授業研究ワークショップ（学習指導案・教材・教具の検討）
- 8月 1日（水） 学習指導案（英語版）の検討2
- 9月 4日（水） 授業の準備状況の確認、教材集・報告書・報告会についての確認、渡航に関する書類提出
- 9月 9日（月） 渡航前最終打合せ
- 9月 14日（土） 広島出発、米国ノースカロライナ州ローリー到着
- 9月 15日（日） 授業準備および米国の先生方と授業打合せ
- 9月 16日（月） グリーンビル現地学校訪問（観察）、イーストカロライナ大学施設見学、同大学授業参加、同大学学生との交流
- 9月 17日（火） グリーンビル現地学校訪問（授業実施）
- 9月 18日（水） イーストカロライナ大学コミュニティースクール見学、ローリーへ移動、ローリー市内（博物館等）研修

- 9月19日（木） エクスプローリス中学校・小学校見学，ワシントンへ移動
- 9月20日（金） ワシントン（スミソニアン博物館等）研修
- 9月21日（土） ワシントン出発，機内泊
- 9月22日（日） 広島到着

2020年 1月21日（火） 「2019 体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

## 2. 実施の状況

令和元年度の体験型海外教育実地研究において参加者 A～D によって開発・実践された授業の概要は、表1の通りである。

表1 実施授業の学年と教科等

学生	学年	テーマと目標
A	4	<p>Let's make Origami!</p> <p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・折り紙を折る活動を通して，日本の伝統としての折り紙の理解を深め，折り紙を通じた友達との交流の良さに気づく。</li> </ul>
B	4	<p>Let's learn about Japanese lunch time and how to use chopsticks well.</p> <p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童が日本とアメリカの給食時間の様子を比較することで，献立や食べ方の相違点・類似点に着目させ，さらに箸を使う活動を通して，食を介した異文化理解を図る。</li> </ul>
C	6	<p>Let's make "Hanko"!</p> <p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハンコ（印鑑）について知ることを通して日本文化を学んでもらい，自分のハンコを作り，実際に使ってみることを通して，日本文化に触れ，自他国の文化について考える。</li> <li>・手紙を通して日米の子ども達の交流を行い，他国の人とつながる喜びを感じさせ，異文化への興味を育む。</li> </ul>
D	8	<p>Let's make "Kagura Men"</p> <p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・神楽を通して，日本の郷土芸能に触れ，異文化を理解するとともに，アメリカと日本との共通する部分に気づく。</li> <li>・お面作成や表現活動を通して，言葉以外のもので自分の考えを表現し，他者に伝えるコミュニケーションスキルを育成する。</li> </ul>

（筆者ら作成。詳細は，松浦他（印刷中）を参照していただきたい。）

（松浦武人\*・松宮奈賀子・渡邊 巧\*）

## IV 研究の成果と今後の課題

Ⅲで述べた体験型海外教育実地研究における参加学生の授業では，単に日本文化紹介を行うのではなく，日本の文化や生活に根付いた題材をアメリカの児童・生徒の生活と比較

したり、関連付けたりする場を設け、また体験を通してそれらの理解や考えを深める授業が展開された。これは長きに渡る本実践の過去の先輩方の実践報告の蓄積から学びながら授業作りを行った成果といえるだろう。また、参加学生それぞれに「アメリカの学校で授業を行うことで気づけた学び」と「授業作りそのものへの理解を深める学び」の双方が生まれたことも大きな成果であった。アメリカで授業を行ったからこそその学びとは、英語へのハードル意識を変容させたことや、自分にとって慣れた、快適なゾーンを出ることの意義を学んだこと等である。後者の授業作りそのものへの学びとは、学習者にとって親しみのないテーマをどのように伝え、興味喚起を行えばよいかや、慣れない題材ゆえの個人差にどのように対応するかといった、日本の学校での授業実践においても欠かせない視点についての学びである。

また参加者の多くが、自身に関わりを持つ日本の学校の児童・生徒との交流を授業に盛り込み、異文化交流の担い手としての教師の役割を体験したことも大きな意味を持つと考える。

一方、1時間だけの指導であることや、学級に深くかかわる形での実習とはなっていないことから、十分な児童・生徒の実態把握に基づく授業実践や支援などが難しい状況になっていることは、学生にとって更に学びの大きい実習体験を提供するという観点において今後の大きな課題といえるだろう。これからの教育を担う「グローバルな視点を有した教師」の育成に、より一層寄与できる授業を展開していくため、これまでの参加者からの忌憚のない声の収集とそれに基づく授業改善も引き続いて取り組むべき課題である。そのための場の一つとしての学校間国際フォーラムの充実と内容の再検討も今後の課題と捉えている。

(松宮奈賀子\*)

## V おわりに

本研究は、令和元年度教育学研究科共同研究プロジェクト経費の支援を受けて実施された、第15回学校間国際フォーラムおよび第13回体験型海外教育実地研究の報告である。今回は現職教員参加者が多かったため、指導技術面を越えた、日米の学校文化の相違点の理解に至る深い学びにつながったと思われる。また、授業体験を通して現地協力校の生徒たちへ一定のインパクトを与え、日本文化への興味を喚起した点ではこれまでの結果が持続的に積み重ねられてきたのがわかる。短期間ではあってもアメリカの教育に深く関わったことで、アメリカの教室に自ら身を置いて、アメリカの教師たちの視点から教育実践を考えようとする文化的な共感（エムパシー）が得られたことが大きな成果であり、評価すべき点であろう。最後に、異なる考え方を持った学習者たちとのコミュニケーション体験が、次世代を担う教員の資質・能力の向上および自信の増加につながることを期待する。

(深澤清治\*)

## 付記

本報告書は、松浦武人・深澤清治・松宮奈賀子・渡邊巧ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究XIII」広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第26巻、印刷中をもとに執筆しており、重複する部分がある。

## 参考文献

- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻, 2007, pp. 43-56。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究II」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻, 2008, pp. 39-53。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究III」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻, 2010, pp. 95-104。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究IV」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻, 2011, pp. 155-168。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究V」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻, 2012, pp. 129-140。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究VI」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第19巻, 2013, pp. 259-269。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究VII」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第20巻, 2014, pp. 161-181。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究VIII」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第21巻, 2015, pp. 143-161。
- 深澤清治・小原友行・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究IX」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第22巻, 2016, pp. 251-268。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究X」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第23巻, 2017, pp. 103-116。
- 朝倉淳・深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究XI」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第24巻, 2018, pp. 131-148。
- 深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究XII」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第25巻, 2019, pp. 109-117。
- 松浦武人・深澤清治・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究XIII」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第26巻, 2020, (印刷中)